

## シャンソン研究会について

「シャンソン研究会」の2017年現在について、少しご説明しておきたいと思います。2002年12月に、わずか4名で立ち上げた研究会でしたが、15年後の今日、研究会員は100名を超えるまでに成長しました。フランス文学、フランス言語学・フランス音声学、フランス音楽、フランス美学、フランス史といった「フランス学」の専門家だけでなく、実際のシャンソン歌手や、日本におけるシャンソンの歌唱の質向上と普及を目指すシャンソン・コンクール主催者、さらには、決して忘れてはならないことですが、研究者につねにエールを送り続けるシャンソン愛好家たち……が、熱心に参加しています。

この研究会は、当初から組織化せず、会費無料、ヴォランティア運営を目指してきました。そこで、まずは発起人の三木原浩史（当時、神戸大学国際文化学部教授）が「代表」、10歳若い吉田正明氏（現信州大学人文学部教授）が「幹事」として出発しましたが、現在は、代表の吉田正明氏、幹事の高岡優希氏（大阪大学非常勤講師）、参与の鎌田隆行氏（信州大学人文学部准教授）、そして顧問に退いた三木原浩史の4人が主になり、周囲の暖かい助力、——特に、会場提供の申し出など、——を得て、年2回の研究会を開催しています。場所は、春は関西の大学（神戸大学、京都大学、関西学院梅田サテライト、追手門学院梅田サテライト……）、秋は「シャンソン研究会」本部でもある信州大学人文学部です。

研究会の内容を伝える「会報」は、毎回、E-mailで全会員に発送していますし、2009年度からは、懸案の年1回の『シャンソン研究誌』発行にこぎつけ、2017年度中には「第9号」がでる予定です。同人誌形式の執筆者負担（印刷費+郵送料）を旨に、全会員に無料郵送配布していますから、遠方で参加しにくい方、事情で出席できなかった方にも、会報と研究誌をとおして、楽しんでいただける仕組みです。ただ、いつまで、この方針が貫けるか、——特に、会員がこれ以上増えたときに可能か、——案じなくもありませんが、実のところは、樂觀しています。

なお、シャンソン研究会の開催報告は、鎌田隆行氏によって、毎回、信州大学人文学部フランス語学・フランス文学分野のホームページにアップされています。そのこともあるのでしょうか、吉田正明代表宛に、複数の大学からのシャンソン関係の論文査読、学会でのワークショップ開催（於広島大学）及び研究発表の司会（於明治学院大学）、さらには、テレビドラマ制作における監修（TBS 放映の『天皇の料理番』でのカフェ・コンセールの実態に関する質疑応答）等の依頼を受けるようになりました。当研究会が、社会的に認知され、一定の社会的役割を果たせるようになったということではないでしょうか。そうであれば、本当に嬉しく思います。

このように、日本におけるシャンソン・フランセーズの基礎研究は、着実に定着し始めました。あたかもこの動きに呼応するかのように、21世紀に入ってから、フランスでも、新しい動きが出てきました。フランスにおいて度々科研調査を行っている吉田正明氏の報告によれば、《近年、BNF（フランス国立図書館）の図書館職員によって、シャンソン関連資料の整理と目録作りが進められ、ようやく学術的シャンソン研究の基礎が整備されるようになり、その成果として、2004年5月26日から12月31日にかけて、BNFにおいて20世紀のシャンソン回顧展が催され、BNF所蔵の様々なシャンソン関係資料が展示されただけでなく、図書館職員たちによる20世紀のシャンソンを回顧する図書が刊行された》そうです。

今後も、この「シャンソン研究会」を舞台に、若い研究者たちが、どんどんシャンソン・フランセーズについて、多角的かつ多彩な論考を発表されていくことを期待しています。

〔文責：三木原浩史〕